

シナ如來藏說の一考察

小 川 弘 貫

ここに地論宗——地論宗南道派の代表者たる淨影慧遠の如來藏說を一考してみたいと思うのである。

一 その如來藏說成立の背景

淨影慧遠の撰述は、大乘義章・大般涅槃經義記・勝鬘經義記・大乘起信論義疏・十地經論義記・地持論義記・仁王經疏・維摩經義記・觀經義疏・無量壽經義疏、溫室經義記等大部のものが残されている。その中大乘義章は淨影慧遠の諸思想の概括的なものを述べてあるものと観ることが出来るであらう。

その大乘義章に援引された經論を見るに、如來藏經・不增不減經・涅槃經・耆掘魔羅經・勝鬘經・四卷楞伽・十卷楞伽・深密解脫・相續解脫・華嚴・仁王・法華・維摩・金光明・無量壽・城喻・阿含の諸經や戒律關係のもの、實性論・攝論・同釋・起信論・菩薩地持經・十地經論・大智度論・金剛般若經論・成實論・轉娑沙論・阿毘論毘婆沙論・雜阿毘曇心論等の諸論がある。

この援引された諸經諸論を觀れば、大乘義章に表わされている諸思想の構成されたその背景が窺れるのではあるまいか。華嚴經・如來藏經・不增不減經・涅槃經・勝鬘經・深密解脫・相續解脫・四卷楞伽・十卷楞伽や實性論・攝論・同釋・起信論・菩薩地持經・十地經論等はその如來藏思想を構成する資料となるものであるということが出来るであらう。

二 淨影慧遠の如來藏說の特異性

(一) 佛性について

大乘義章義法聚佛性義に於て、

佛性義五門五別、

釋名一・辨體二・料簡有無内外三世當現之義三・明因義四・就(說)性所以五(大正・四四卷・四七二上)

として佛性を五つの方面から考察し説明している。即ち、その名稱、その實體を説明し、有無・内外・三世・當現等の方面から検討し、又佛性の因の義や佛性を説示される所以のものを説いている。

その名稱に於ては、

佛者……此觀名覺、返妄契眞悟實名覺

性者……種子因本

體

不改

性別

として佛性とは返妄契眞悟實の性と説き、その性については、體即ち性とはそのもの自體であり、種子因本即ちそのもの自體を生ずるものであり、又、不改即ちそのものとして改變しないものであり、尙性別即ちそれぞれとして別異のものであると解している。體・不改・性別については大きくは情と非情とに分け、尙情については因と果・因果に通ずるものの三方面から之を説明している。まず情非情についてであるが、不改に於ては非情を通説諸法體實不改とし、性別においては一切諸法實別於情相虛妄之法とし、體に於ては情と非情とを能知性、所知性として、非情を諸法自體とし所知性―是所知性・通與内外とし、情を能知性―是能知性・局就衆生・非情として解している。この情・非情について解するところは、佛性の意義の擴大展開として隋代の他宗の佛性の意義の擴大的解釋の展開とともに注意しておくべきことであろう。次に情についてはさきにも一言した如く、因・果・通因果の三方面から之を説明しており、その中不改・性別については

それ以上のものも見出し難いが、體については尙よく考察する要があると考えられる。

體義

一佛因自體・名爲佛性・謂眞識心

二佛果自體・名爲佛性・所謂法身

第三通就佛因佛果同一覺性・名爲佛性（大正・四四卷、四七

二上）

佛性の體義について、かくの如く、佛因佛果に通ずる同一覺性を佛性とし、尙佛果に於ける佛性を法身とし、佛因に於ける佛性を眞識心と説いている。この眞識心と説いていることは注意しておかねばならぬことである。

以上の如く、體、不改、性別に於ては、大きくは情と非情とに分ち、次に情を、因、果・通因果と細分して解しているが、種子因本についてはただ

種子因本之義、所言種者衆生自實如來藏性、出生大覺、與佛爲本、稱之爲種、種猶因也

と説くのみである。

次に佛性の辨體についてであるが、その佛性の體を一乃至無量等と數に於て之をとらえ、而も増數的順序を以て之を説明しているのである。この中一、二等は特に注意すべきものであると思われるし、三、四、五、六、七、十等は如來藏所説經論からの整理的解釋の説明と觀ることが出来るであら

う。

佛性者蓋乃法界門中一門也、門別雖異妙旨虛融……

成立爲一……性者一味湛然若虛性

成分爲二

一約緣分二、緣有染淨、染謂生死、淨謂涅槃、生殘涅槃體皆是性

二體用分二、廢緣論性(體)隨緣辨性(用)

三能所分二、能知性者謂眞識心、以此眞心、覺知性故、與無明合、便起妄知、遠離無明、便爲正智

所知性者謂如、法性、實際、實相、法界、第一義空、一實諦等四對果分二、法佛性者、本有法體、與彼法佛、體無增減、淨穢爲異

報佛性者、本無法體、唯於第八眞識心中、有其方便所生之義

(大正・四四卷、四七二下)

右の如く二として見るところに於ては、染縁・淨縁の二、廢縁・隨縁の體用の二、能知性・所知性の能所の二、法佛性・報佛性の本有・本無の二等の二に於て佛性を考へている。この中第三の能所不二の能知性・所知性即ち眞識心・如法性等は注意しておくべきものであろう。

三とするものは、不善・善・佛果、染・淨・非染淨、體・相・用、法・報・應の三佛性等であり、

四とするものは、一闡提と善根人の相互有無・二人俱有・二人俱無、因・果・因果・非因果等であり、

シナ如來藏説の一考察(小 川)

五とするものは、因・因因・果・果果・非因果であり、六とするものは雜血乳・出血乳・酪・生蘇・熟蘇・醍醐の喩説によるものであり、

七とするものは、五陰と我の六法に不即のものを一とし之に不異の六法を加えたもの、或は常没・暫出還没・出已即住・住已觀方・觀方已行・行已後住・水陸俱行の七であり、十とするものは、實性論の體・因・果・業・相應・行・時差別・遍處・不變・無差別の十である。

以上の如く三―十は前に一言した通りである。

有無・内外・三世・當現等の諸觀點からの検討は暫くおき、第四の佛性の因義の考察はシナに於ける佛性考察として注意すべきものである。大乘義章は之を緣正分別と生了分別の二分別等を以てしているのである。

親而感果名爲正因

疎而助發名爲緣因

若就菩提總爲一果

佛性本體起果義強故說正因

諸度等行方便助發說爲緣因

若分果德性淨方便二種差別、是則緣正差互不定

若望性淨菩提涅槃是則佛性同體相起以爲正因

諸度等行名爲緣因

若望方便菩提涅槃諸度等行同類生果名爲正因

佛性理實說之爲緣

（大正・四四卷・四七六下）

望方便果

報佛之性是其生因、真心體上從本已來有可生義生彼果故

望性淨果

法佛之性但是了因、非是生因……諸佛之性是真識心、體有從本已來有可顯了成果之義故名了因

若就果德總以爲一

佛性說爲生因同一體性轉變相起義說爲生

諸度等行方便顯了說爲了因

若就果德分其性淨方便差別是則生了二相不定

若望性淨菩提涅槃諸度等行是其了因

望彼性淨之果但是正因非生非了

佛性之體隱時名因——就因以望因外更無果體可生、顯時名果——據果

以望果外更無因體能生故非生因

佛性據體非是方便顯了之行故望涅槃、不名了因

若望方便涅槃菩提教道之行亦生亦了

籍修諸度起彼報果故名爲生

前諸地中所成方便教道行德與體相應德體雖成望後雖爲闡障所覆不得顯了成大菩提中有所修方便諸行道除闡障了前諸德成大菩提故名了因

了因

亦生亦了

即性起彼方便果德……故名生因

佛性爲彼方便行顯體則明了了之性資成果德故名了因

右の性淨・方便の立場の設定や生了に於ける真心體上……

有可生義の生因の説明・真心體有……有可顯了成果之義の了因の説明等は注意しておくべきところであろう。尙涅槃・菩提・淨土・三佛等に於ける正因緣因・生因了因等の説明は委曲を盡せるものといふことが出来るであろう。正縁・生了等

については又詳しく之を考察する機會を得たいと思う。

五門中第五の佛性を説く所以は、涅槃經・寶性論等を援引し之を説明している。

以上は佛性義に於ける佛性説明の概要であるが、この中、1、從來の所説を繼承するもの——この中には諸經諸論に説かるものと、シナに於て佛性説明の進められたものとが含まれる——と、2、地論宗——地論南道派——淨影慧遠——大乘義章等に於てその特異性を發揮せるものを見出すことが出来る。

地論宗の特色は識について眞妄等の觀點から之を検討したことにあるといふことが出来るであろう。

佛性觀釋に於てもこの特異性を表していることと見ることが出来る。

1、佛の解釋に於て返妄契眞眞悟實名覺とし

2、又佛因自體名爲佛性謂眞識とし

3、能知性者謂眞識心

4、唯於第八眞識心中有其方便可生之義

5、真心體上……有可生義

6、真心體有……有可顯了成果之義

等佛性の解釋を楞伽、起信等に見らるる如來藏阿梨耶識を以てし、尙之に眞妄等の觀點から之を檢討することにとめてゐるのである。ここに地論宗の如來藏思想の特異性を見出すことが出来るのである。

隨つて地論宗のこの特異性を詳細にするためには、この佛性義とともに八識義を考察しなければならない。

(二)識について、

阿梨耶者此方正翻名爲無沒、雖在生死不失沒故、隨義傍翻名別有八

一、名藏識、如來之藏、爲此識故……以此識中涵含法界恒沙佛法故名爲藏

又爲空義所覆藏故亦名爲藏

二、名聖識、出生大聖之所用故

三、名第一義識、以殊勝故

四、名淨識、亦名無垢識、體不染故

五、名眞識、體非妄故

六、名眞如識……心之體性無所被(眞)無所立(如)

七、名家識、亦名宅識、是虛妄法所依處故

八、名本識、無虛妄心爲根本故 (大正・四四卷五二四下)

阿梨耶識を如來藏佛教の立場から翻譯して無沒とし、傍翻として八義を出している。八義の中第一に藏識の義である

シナ如來藏說の一考察(小川)

が、一般に耳なれている法相宗唯識に於ける藏識の義と異つて、如來之藏爲此識として、この藏の義は如來藏の藏の義であるとし、而もその如來藏は、此識中涵含法界恒沙佛法たる意味の積極の意味を有する如來藏の義であると説き、その後消極の意味の如來藏の義を付している。この藏識の義を如來藏の義としたことは注目していい説明であろう。第二の聖識、第三の第一義識は一般的として、第四の淨識・無垢識はこの立場の佛教としては重視しておかねばならぬものである。第五の眞識はここでは特に注意しておきたい義説であり、また後に説明することと関連するものである。第六の眞如識は第一、第四等とともに取扱るべきものであろう。第七、第八の家識、宅識或は本識等の義は如來藏佛教としてはその一面の義説であり、この方面のみから説明するとすれば法相宗唯識の識の義を顯すこととなるであろう。以上の隨義傍翻八義の中、とくに第一第五に留意しながら、次の三識義等を觀てみたいと思ふのである。

攝末從本、會虛入實

一切諸法皆是佛性眞心所作……於此分中能起之心變爲諸相說爲眞識以一切法眞所作故從本歸末、廢末談本

心性本淨緣起集成無盡法界是其眞識

眞識……會虛入實實處無妄

從義分別

眞中四者一是用相謂六識心 眞心變異爲根塵識……所作六識依於眞心所作六根了別眞心所作六塵

二者我相

一法實我、如來藏性是眞是實性不變異稱之爲我此眞心爲妄所依與妄爲體故說爲我二假名集用之我 佛性緣起集成我入

三無分別相 眞心雖是神知之性而非攀緣取捨之法故無分別

爲癡覆未同佛智照明顯了故無分別故爲妄薰生無明地隨妄流轉

四理相、如實空義……非有、如實不空……非無、能緣起生一切法

……非無、體常寂……非有（大正・四四卷・五二六）

右の説明の如く眞識は本淨の心性が無盡法界を緣起集成せるものであり、此分中の能起之心が諸相、一切諸法を變爲せるものである。この眞識を客觀的に、即ち法的に表現すれば以上の如くであるが、之を主觀的に、即ち心的に、識的に表現すれば眞中の四の如くであらう。眞中四の四理相、三無分別相は第八眞識で、四理相の如く、如實空義、體常寂或は如實不空、能緣起生一切法と表わすことが出来るであらうし、又三無分別相の如く、眞心雖は神知之性而非攀緣取捨之法と現わすことが出来るであらう。無沒識—如來藏識—眞識の眞識は如實空の如實不空識であり、無分別の分別識である。尙、眞中四の二の我相は第七執我識である。此眞心爲妄所依與妄爲體と眞に基礎づけられた第七識である。又その一は六識である。以上の如く總じて之を言えば一眞識であり、別して之

を言えば第八、第七、第六識等の三眞識である。尙三識について、

A、一本識、如來之藏爲於無始惡習所薰生無明地與之和合共爲本

識

二依本識起阿陀那執我之心……此心……四惑相應

三依本識生起六種根塵及識（大正・四四卷・五二八下）

B、一事相了別謂前六識

二妄相了別謂第七識

三眞相自體了別謂第八識

前六及七同名妄識

第八名眞

第八眞識體如一味妙出情妄故說爲眞

隨緣種種異變體無失壞故名爲眞

恒沙眞法集成內照自體恒法故名爲眞（大正・四四卷・五二五）

と述べてあるが、この中第八についてBは唯眞の面から之を説き、Aは眞妄和合の面から之を説いているといふことが出来るであらう。即ちBは第八眞識體如一味妙出情妄と説き、Aは如來之藏爲於無始惡習所薰生無明地與之和合共爲本識と説いている。第七についてはBは妄識或は妄相了別と簡単に説いているのみであるが、Aは本識に依り起つていふところの阿陀那執我之心と説き四惑と相應する心であると説明している。六識も亦妄識であり、本識に依つて生起していること

ろの六識であると説かれている。

以上の如く阿梨耶識即ち無沒識は如來藏識であり、非妄の眞識である。而して總じて之を言えば一眞識であり、別して之を言えば眞中四に説かるる如き四理相、三無分別相の第八、二我相の第七、一の六識心の三識、又は眞相自體了別、第八眞識、本識等と説かるる第八、妄相了別・依本識起阿陀那執我之心とする第七、事相了別・依本識生起六種心とされる六識の三識である。如來藏佛教の立場に立つ、即ち如來藏阿梨耶識の思想の立場に立つ識義であるが故に、上述の如く、阿梨耶識—無沒識—如來藏識—眞識（一眞識—三識）と順序して説かるることは當然のことであろう。尙眞識については、

眞中分二

一阿摩羅識此云無垢亦曰本淨就眞論眞眞體常淨故曰無垢
二阿梨耶識此云無沒即前眞心隨妄流轉體無失壞故曰無沒

妄中分二

謂妄與事

（大正・四四卷・五三〇）

と説き、さきにも觸れた如く、唯眞の眞と眞妄の眞とを明かにしているのである。

尙眞識と佛果について一言したい。

如來眞識爲體……三佛皆用眞識爲體

眞識之心本隱今顯說爲法身

即此眞心爲緣薰發諸功德生說爲報佛

シナ如來藏説の一考察（小川）

如來藏中眞實緣起法門之力起種種化説爲應佛

（大正・四四卷・八三九中）

以上は眞識による佛身の説明である。全體としては如來眞識爲體として、如來の體を眞識と觀、又別しては法・報・應の三佛が皆眞識を體と爲すことを説いている。法佛は眞識之心の本隱今顯のものであると説き、報佛はこの眞心が縁に熏發せられて諸の功德を生じたものとし、應佛は如來藏の中の眞實緣起法門の力が種種の化を起しているものとして、眞識をもつて三佛を説明している。如來藏是衆生體（大正・四四卷・八三八上）と説いているが、如來藏即ち眞心、眞識を全體としての體と考えられているようであるし、随つて如來も眞識爲體であり、衆生も如來藏爲體であると説かれている。

ついで菩提について、

眞識之心正是道體（大正・四四卷・八二九下）

心者……三、一法二報三應、法者眞識之心體是知性、報心者如來妙修淨業因緣勸發眞心合眞心中智慧三昧陀羅尼等無量德生……

と説く。眞識を道の體としたところはその佛身觀に於て眞識を佛身の體と觀たこととその調を同じくするものであろう。涅槃と同じく菩提も廣義に使用されるもの、狹義に使用されるものが觀られるが、ここでは狹義の菩提としてのその説明であると考えられるが法心を眞識之心は知性と説いている。涅槃の説明の場合も同じ形の説明が用いられるから詳しくは

その場合に考えたい。

涅槃について性淨・方便・應化の三涅槃を説いている。即ち、

性淨涅槃―體窮眞義充法界
方便涅槃―過無不盡德無不備
應化涅槃―妙用曠博化現無盡

(大正・四四卷・八一四上)

と説かるる如くである。

A、性淨涅槃顯本真心以之爲體、真心體是諸功德性

(大正・四四卷・八二二中)

眞識之心體是一切功德之性

(大正・四四卷・八二六下)

B、眞心謂八識心如來藏中過恒沙法緣起集成覺知心事以此眞心覺知性故與無明合便起妄知息去無明便爲正知……始覺眞心說之以爲一切種德今此就其涅槃門說故說此心以爲涅槃

(大正・四四卷・八一五下)

法身……體實有……有於過恒沙法此法皆依眞心說之眞心體是神知之性能有覺照故得名覺

(大正・四四卷・八三七下)

彼心顯了説爲諸佛一切種德

(大正・四四卷・八九二中)

眞識之心從緣始顯眞心說之以爲一切種德名爲行德

(大正・四四卷・八二二下)

眞識之心本性清淨而爲妄染之所覆蔽相似不淨後息妄染彼心始顯始顯眞心如其本性內明法界說之以爲性照般若

(大正・四四卷・八二二下)

眞識と涅槃とについて諸所に以上の如く説かれているが涅槃

に於てもその體として眞識が考えられているし、又眞識が功德性とせられている。以上はAに於て説かれているところであるが、Bに於て觀らるる如く、始覺も亦眞心であると説かれているのである。

以上の如く佛身も、その内容たる菩提も涅槃も、凡て、眞心、眞識を體として考えられているのである。

以上の佛性―如來藏―眞識の系列に於て説かるる佛性義―八識義は淨影慧遠の、大乘義章の、地論宗の如來藏說の特異性を發揮せるものであると觀ることが出来るであらう。

尙大乘義章に表わされている如來藏思想を全般的に概観すれば次の如くであらう。その説かるるところは佛性義、八識義、涅槃義、菩提義、淨土義、佛身義その他等である。この中佛性義、八識義は主として因の立場から説かるるものであり、涅槃義、菩提義、淨土義、佛身義その他は果の立場から説かるるものである。佛果の内容は菩提涅槃の妙果であり、又人格的に表現すれば佛身であり、之を客觀的に佛身を投射すれば佛土である。その他とは佛智、佛德等についてのことであるが、涅槃義乃至佛身義その他は要するに之を全般的に一括すれば佛果である。以上の如く佛因、佛果の立場に立つて如來藏を廣説している。随つて佛性義八識義は因の立場から之を説くところが強く、涅槃義乃至佛身義その他は果の立場から之を説くところが強いということが出来よう。以上についての詳説はこれまた機會を得たい。